R E Q U I E M

高木仁三郎さんを偲ぶ会

市民科学者の逝去を悼む

昨年12月10日、東京日比谷公会堂において「高木仁三郎さんを偲ぶ会」が行われた。当日は公会堂の前に参列者の長い列ができ偲ぶ会開始後も参列者は増え続け、最終的には2千人以上の人が参列した。会場を埋め尽くす人に圧倒されながら、改めて高木さんの人望と偉業が実感された。

高木さんご自身がこの偲ぶ会の為に、死の直前に病床で走り書きされたという「友へ」と題されたメッセージが代読されると、場内はしんと静まり返り、参列者がその最期の言葉に神経を集中し、耳を傾けていることが感じ取れた。メッセージが読み終えられると、天国の高木さんに届けといわんばかりの、割れるような拍手が公会堂中に響きわたった。そのメッセージを引用させて戴く（一部割愛）。

「まず皆さん、ほんとうに長いことありがとうございました。体制内のごく標準的な一科学者として一生を終わっても何の不思議もない人間を、多くの方たちが暖かい手を差しのべて鍛え直してくれました。それによってとにかくも『反原発の市民科学者』としての一生を貫徹することができました。

反原発に生きることは、苦しいこともありましたが、全国、全世界に真摯に生きる人々と共にあることと、歴史の大道に沿って歩んでいることの確信から来る喜びは、小さな困難などをはるかに超えるものとして、いつも私を前に向かって進めてくれました。幸いにして私は、ライト・ライブリフット賞を始め、いくつかの賞に恵まれることになりましたが、繰り返し言って来たように、多くの志を共にする人たちと分かち合うべきものとしての受賞でした。

残念ながら、原子力最後の日は見ることができず、私の方が先に逝かねばならなくなりましたが、せめて『プルトニウムの最後の日』くらいは、目にしたかったです。でもそれはもう時間の問題でしょう。すでにあらゆる事実が、私たちの主張が正しかったことを示しています。なお、楽観できないのは、この末期症状の中で、巨大な事故や不正が原子力の世界を襲う危険でしょう。JCO事故からロシア原潜事故までのこの1年間を考えるとき、原子力時代の末期症状による大事故の危険と結局は放射性廃棄物が垂れ流しになっていくのではないかということに対する危惧の念は、今、先に逝ってしまう人間の心を最も悩ますものです。

後に残る人々が、歴史を見通す透徹した知力と、大胆に現実に立ち向かう活発な行動力をもって、一刻も早く原子力の時代にピリオドをつけ、その賢明な結論に英知を結集されることを願ってやみません。私はどこかで、必ず、その皆さまの活動を見守っていることでしょう。

私から一つだけ皆さんにお願いするとしたら、どうか今日を悲しい日にしないでください。泣き声や泣き顔は、私にはふさわしくありません。今日は、脱原発、反原発、そしてより平和で持続的な未来に向かっての、心新たな誓いの日、スタートの楽しい日にして皆で楽しみましょう。高木仁三郎というバカな奴もいたなと、ちょっぴり思い出してくれながら、核のない社会に向けて、皆が楽しく夢を語る。そんな日にしましょう。

いつまでも皆さんとともに　高木仁三郎

世紀末にあたり、新しい世紀をのぞみつつ」

参列者によって語られた高木さんにまつわるエピソードの中にしばしば楽しかった思い出も紹介され、客席から笑い声も聞こえた。高木さんが好きだったという弦楽四重奏も演奏され、生前のご希望通りの「楽しい」偲ぶ会に、天国の高木さんもご満足されたことと思う。

尚、市民のための科学を目指す研究者や運動家を育てたいと全財産約2千万円を遺贈した高木さんの遺志を活かし、弁護士の河合弘之氏を代表とする「高木仁三郎市民科学基金」の設立委員会の発足が発表された。

あさひ銀行市ヶ谷支店　普通預金　1221981　高木基金代表

高木仁三郎 / たかぎ・じんざぶろう

在野の科学者として、日本の脱原発運動を終始リードしてきた。専門知識に裏打ちされた活動は、原子力開発を推進する国側にも一目置かれた。

1938年　群馬県生まれ
1961年　東京大学理学部卒業（65年 原子核研究所助手）
1969〜73年　東京都立大学助教授
1975年　原子力資料情報室設立
1997年　「ライト・ライブリフット（正しい暮らし）賞」受賞（注）
2000年10月8日　永眠（享年62歳、直腸ガン）

（注）平和や人権、環境など人類が今日直面する課題の解決に尽くした個人や団体に与えられる。もう一つのノーベル賞（Alternative Nobel Prize）と呼ばれる。

著書：『鳥たちの舞う時』『市民科学者として生きる』『プルトニウムの恐怖』他多数